

論である第3章の分析を意義づけるための理論的な考察の部分とみなされる。

続く第3章が、本書の中核を成す部分であり、全体は4節に区分されている。そのうち第(1)―(3)節は、主としてケントゥリア地割に関する先学の諸研究をレビューしたものである。ここでは、日本人研究者として小川琢治、藤田元春、米倉二郎らの業績が詳細に検討され、また我が国におけるケントゥリア研究に大きな先導的役割を果たしたヨーロッパの学者として、アウグスト・マイツェン、マックス・ウェーバーらによる成果を評価している。

第3章の中でも、とりわけページを割いて力説を試みているのが、第(4)節である。本節は、a～gの7項目に分けられ、本書に掲載された図・地形図の大半がここで紹介されている。分析の中心は、ケントゥリア地割の分布とその具体的遺構、分布範囲に関するものである。そもそもケントゥリア地割は、古代ローマの植民地に施行されたため、その分布範囲はかつての植民地の領域とほぼ一致する。具体的には、西はブリテン、北はライン・ドナウの流域、東は小アジアやシリア、南はアフリカ北岸である。このうち、本書で具体的に分析されているのは、ケントゥリア地割の遺構が明確で、かつ広域的に分布している北イタリアとその周辺の平原についてである。中でもポー河流域に関しては、その南岸と北岸とに分けて、詳細な地割の分析・考察がなされている。その結果、ケントゥリア地割の遺構は、ポー河流域縁辺山麓丘陵の末端から平地へと移行する緩傾斜面地帯に、比較的広範囲にわたり団地的に分布していること、リミテス（ケントゥリア区画の内部を小さく区切る区割りの道路）の方位は、全面にわたり同一方向ではないこと、等高線に関係なく、緩傾斜や微地形を無視して施行されている場合が多いこと、また地割の方位は、同一平野の小河川流域内の単元的地域内においても、小河川を介して地割の方位が変わる場合があること、などの事実が指摘された。

第4章と第5章とは、本論を踏まえてのケントゥリア・条里地割に関するそれぞれの研究レビューで、我が国におけるケントゥリア研究、海外における条里研究の成果を、総合的に評価したものである。また最後の英文は、イタリアおよび千葉大学の雑誌にそれぞれ掲載された論文を骨子とした、欧米研究者向けの論説となっている。この内

容は、本書の第3章第(4)節とほぼ同一とみなされる。以上、内容を簡単に紹介してきたが、参考・引用に用いられた論文数は非常に多く、その中には日本語・英語論文ばかりでなく、イタリア語・フランス語等によって書かれた成果も多数含まれている。

一方、本書の通読を終えた後で感じた課題も、いくつか指摘しておきたい。第1点は、あまりにも第3章に重さが置かれたために、やや章立てがアンバランスになったことである。あるいは他の章に比べて分量の多い第3章の部分を、2～3の章に分けることも一案だったのではないかと思われる。第2点は、本文中に図番号の指示が無く、どこで本文と図とを対応させるべきかが、やや分かりにくかった点である。本文中の該当個所に図の参照番号が明記されていれば、さらに読みやすかったのではないかと悔やまれる。また、図中に本文の記述に応じた地名（河川名、道路名などの）をもう少し多く記入していただければ、さらに分析・考察の迫力が感じられたのではないかと惜しまれる。いずれにしても、このような点は、本文の説得力を大きく崩すものではないことを、ことわっておきたい。

順序は前後したが、最後に「本書成立の経緯」について、触れておく。この部分には、先年亡くされた奥様のことが繰り返し記されており、本書に掲載された地図類の作成等に当たっても、しばしば奥様の協力を得たことが紹介されている。おそらく先生にとって、ケントゥリア研究は、奥様との思い出のひとつきわ深いテーマであったことが拝察される。ここに改めて奥様のご冥福をお祈りさせていただくとともに、一方では、今後、先生の心の中の奥様と「二人三脚」で、この壮大なテーマに関するご研究を是非続けていっていただきたいと切にお願いしながら、筆を置きたいと思う。
(片平博文)

奈良地理学会編：

『大和を歩く―ひとあじちがう歴史地理探訪』

奈良新聞社 2000年11月

A5版 339頁 本体1,800円

「大和は国のまほろば」、歴史地理学を志す者にとって、奈良県は憧れのフィールドである。巻末に付された参考文献をながめれば、いかに多くの歴史地理学者が奈良県をフィールドにしてきたことか、よく理解できる。創立75周年を記念して、

伝統ある奈良地理学会は奈良県の歴史地理を現地
で体感しながら学べる格好の書物を出版された。
75周年を心よりお祝い申し上げるとともに、充実
した内容の本書の刊行を喜びたい。

本書の副タイトルには「歴史地理探訪」とあり、
YAMATO WALK GUIDE BOOK と付記されている。
しかし、単なる旅のガイドブックならば、学
会誌で紹介するはずもない。親しみやすい装丁、
豊富に写真や図表を掲載してはいるが、一般のガ
イドブックとはまさに「ひとあじちがう」のであ
る。奈良地理学会会員の錚々たる執筆陣が専門的
な内容を平易な文体で著し、歴史地理学の多彩な
テーマをあまねく紹介している。この点で、本書
は歴史地理学の入門書といっても良いであろう。

本書の構成は、①大和歴史地理の概説、②33の
地域別の見所とその解説、③地理好きには必要不
可欠なデータ編からなる。また裏表紙には、33の
地域の位置を示す索引図、ならびに大和歴史年表
が掲載されている。

①概説編では、大和の地形環境、奈良盆地の水
系（気候と湿原を含む）、先史・古墳時代の大和、
宮都―「日本」誕生の大遺産―、中世の大和、
近世の大和、近代の大和、大和の道―古代から
現代まで―、が盛り込まれている。それぞれの
権威が執筆されており、学ぶべき点が多い。昨年
出土した亀形石造物もいち早く紹介されており、
奈良盆地の水系図や荘園分布図などオリジナルな
図も掲載されている。通史的に理解しようとする
と、物足りなさを感じるかもしれない。しかし、
それは本書の意図するところではない。むしろ、
どのような研究テーマが取り上げられてきたか、
すなわち歴史地理学を研究するうえで何が重要か
を理解すべきであろう。

本書の中心は②である。奈良公園界限、平城宮
とその周辺、奈良町、西の京・西大寺・学園前、
田原・柳生、生駒、大和郡山・矢田丘陵、王寺・
三郷・平群、斑鳩・安堵、河合・広陵・上牧、二
上・当麻・香芝、田原本・三宅・川西、大和高田、
天理、都祁・山添・月ヶ瀬、三輪・山の辺の道、
桜井・初瀬、橿原・今井、明日香、高取、大宇
陀・菟田野・東吉野、榛原・室生、曾爾・御杖、
葛城・新庄、御所・金剛山、五条・西吉野、吉野
山、下市・大淀・黒滝、天川、川上郷、大塔・野

迫川、十津川、北山郷の33地域が取り上げられて
いる。それぞれ、地域の概要を記した「歩くポイ
ント」、朱線で歩く道を示した25,000か50,000分
の1地形図からはじまり、見所の解説が載せられ
ている。交通機関や歩行距離まで示されているの
で、旅の予定を組みやすい。これをみると、各地
域は1日ないし2日（山地は4泊5日の例もあ
る）で回れるよう配慮されていることがわかる。
また、小さいながらも鮮明な写真が豊富に盛り込
まれているので、ポイントを外さずに見学できる。

学会に参加するだけではもったいないと、絵図
や古文書を探したり、現地を見に行ったりする。
かつて、環濠集落の稗田を一人で歩いたことがあ
った。しかし水防用の請堤まで足を運ばずに戻っ
てしまった。本書を読むと、こういうものも残っ
ていたのか、見ておけばよかったと随所で後悔す
る。もちろん行ったことのない場所が多く、今度
はあそこを見に行こうと、自然に気持ちが高ぶる。
読者をその気にさせるのである。これが本書の意
図なのかもしれない。

③データ編は、奈良県地形図一覧・地形図記号、
市町村役場所在地一覧、市町村別の人口変化、イ
ンターネット情報、乗りものガイド、博物館・図
書館ガイドである。まさに、至れり尽くせりの感
がある。加えて、執筆陣推奨の旅館・ホテル一覧、
うまいもの屋などを掲載したら、ガイドブックと
しては完璧とも思えるのだが、それをしないところ
がむしろ好ましい。

最後に、本書には随所に1頁ずつ38のコラムが
配されている。地形図の基礎知識、大和の中世絵
図、条里とその計測、地籍図と地名、中央構造線
などは、地理学の基礎を示す点で有用であるし、
奈良県の言語文化圏、筆と墨、大和の民家、茶粥
と柿の葉ずしなどは、奈良の文化を知ることがで
きる。また、西安―奈良の姉妹都市、アメリカ人
地理学者のみた戦前の奈良盆地農村などは、興味
深い内容であった。

これだけ内容豊富な本書が1,800円とはありが
たい。本書を小脇に抱えて奈良を旅してみたいは
いかだろうか。きっと「まほろば」を体験できる
にちがいない。

(小野寺淳)